

インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間（平成26年度第1回研究会）

報告者：宮原 暁 AA 研共同研究員（大阪大学グローバルコラボレーションセンター）

報告タイトル：“Chinese Exchange”：A Historical Overview and Issues

## “Chinese Exchange”：A Historical Overview and Issues

宮原 暁

### 1. 課題

Alfred W. Crosby は、コロンブスのいわゆる「アメリカの発見」以降、ヨーロッパ人が、アメリカ、アジア、アフリカとの文化接触を通じて、ヨーロッパに新たな穀物や本源的蓄積を可能とする財をもたらすとともに、ヨーロッパ以外の地域をヨーロッパ人にとって快適な空間に変容させていく過程を、“Columbian Exchange”と呼んだ(Crosby, 2003; cf. Mann, 2012)。

本報告の目的は、“Chinese Exchange”とも呼ぶべき同様の過程を、南宋期からアヘン戦争前までの福建省から東南アジアへの人口移動の歴史を俯瞰するなかにとり、中国大陸と東南アジアの間の移動に伴う人々の経験の蓄積を通して、移動の経路上にどのような空間が生み出されるかを明らかにすることにある。

中国大陸と東南アジアの間の人口移動は、それぞれの地域の個々の政治的、経済的、社会的要因や、ヨーロッパ勢力の世界展開(the post-1500 globalization of the west European economies)を背景として生じたものと説明されがちであった。それは、移動者が諸要因に翻弄される存在、もしくは環境から疎外された存在として見なされがちだったことを意味している。

人の移動に関する新たな研究の潮流は、移動が所与の環境のなかで条件づけられるのではなく、旅の軌跡や移動の経験、それらを通じた環境の創造に人口移動のリアリティを見いだそうとするようになってきた(Ingold 2011; ギルロイ, 2006 etc.)。

本報告は、こうした新たな潮流に即して、これまで「中国系の人口移動の歴史」として記述されてきたものを、移動に伴う人々の経験の蓄積として再・表象(represent)、再解釈を試みる。そうすることで、人々が大陸と東南アジアの間を主体的に移動するなかで生じた自律的な空間の輪郭を、本パネルの表題にかかげた diasporic space の一類型として、描こうというのである。

こうしたテーマに即して、本報告では、移動による環境の変容：人口移動が中国大陸と東南アジアの双方の生態学的、社会的環境をどのように変容させたか、またそうして新たな環境は、人口移動にどのような影響を与えたか、という問いに答えようとする。この問いは、人口移動の特質を移動者の経験に即して理解しようとするれば、移動者が東南アジア地域への移動に伴って、どのように商業活動を行い、どのような意味で商人であったかという問いに置き換えることもできる。

南宋期以降の中国から東南アジアへの移動の経験の中心にあるものが交易であったことは、言うまでもない。こうした交易、そしてそれに従事する「商人」がある種の二重性を備えた存在であったことは、すでに多くの研究によって指摘されてきた。

そうした二重性は、時代によって多少異なるものの、商人としての性格に対する「貿易の管理者としての性格」(桑原、

1989)、「水軍の将官」(深澤、2005)、「逗留先の王権の官僚」(山内、2003)といったように、私と公の両面を併せ持つ存在としてとらえられている。

この点に関して、ウィリアム・マクニール(William McNeill)は、『戦争の世界史』において「商人的なものの見方と文官的なそれとの間の部分的な融和」や「商人と軍事の同盟」、あるいは「政治と商業両にらみ」といった表現で宋代から明代の中国の海外貿易の特徴を言いあてている(マクニール、2014: 70)。こうした二重性は、政府の指令構造と市場経済における交渉の二律背反というマクニールの本の主題とも重なっており興味深い。

こうした交易商人は、中国と東南アジア社会をつなぐ媒介者として、東南アジアの政治、経済、社会に大きな影響をもたらした。中国系商人による交易の東南アジアと中国双方での社会的な意義について、マクニールは、次のように評価している。

(中国の国境外においては)中国の影響で遠隔地感の貿易が盛んになって、市場を介する社会関係が従来とは比較にならない大きな意義を帯びるに至り、そのことが、中国の国境内で起こったことよりもはるかに永続的かつ持続的な経済的離陸を準備する結果になった」(マクニール、2014:113-114)。

(これに対して中国では、11世紀から16世紀に至る商業主義の進展は、他の地域に先駆けたものではあったが)中国歴代王朝の指令構造は、萌芽してくる市場経済のうえにのって、バランスをとり続け、一度も統制を失うことはなかった(マクニール、2014: 110)。

移動と商人の持つ二重性を契機とした Diasporic Space の創造は、東南アジアでは顕著であったものの、中国大陸では限定的であった、というのである。

一方、16世紀以降、東南アジアでの Diasporic Space の自律性、および中国でのそれを疎外する要因の双方は、ヨーロッパ勢力の影響を強く受けるようになる。中国から東南アジアへの人口移動は、地域内の移動から、ヨーロッパ勢力のインパクトによって条件づけられた世界の一部での移動へと、大きく意味を換える。しかし、それは自律性の完全な喪失を意味していない。中国系の人口移動は、the post-1500 globalization of the west-European economies を与えられた条件としながらも、環境を変容させ、生存を支え、快適性を増大させる新たな環境を創造してきたのである。

Lai は、Pan Lynn 編の海外華人百科全書のなかで、“The new global economy, with its heartbeat located within the transatlantic complex, intruded but did not fundamentally transform regional economic traditions.”と述べている(Lai, 1998: 53)

Columbian Exchange によって西欧近代的にフォーマット化された世界において、中国系の人口が移動を通して創造する環境とはいかなる環境であろうか。またそうした環境の創造と中国系人口移動の根幹にあるものは何か。本報告では、主にアヘン戦争以前における閩南人の東南アジアへの移動の歴史を、人類学的な観点を変えて振り返ることで、いくつかの仮説を提示しようとする。

中国系の人口移動は、何も閩南人の東南アジアへの移動に限ったものではない。古くは、西域を通るオアシスロードの交易や、モンゴルの遠征に加え、海のルートに関しても、寧波を拠点とする東北アジアとの交易や、19世紀半ば以降の顕著となる広東省から東南アジアやハワイ、北米への移民、浙江省温州から欧州への移民も、Diasporic Space が創造される契機のいくつかとして注目される。本報告が扱う南宋期からアヘン戦争期の閩南からの人口移動は、その

一つに過ぎない。しかし、中国大陸に限らず、世界の様々な場所で生み出されるいくつもの Diasporic Space がいかに干渉しあっているか、といった中国系人口移動に関わる今日的な課題を論ずるうえで、19 世紀以前の地域社会の形成は、ひとつの参照枠を提供すると考えられる。

本報告では中国系の人口移動を、これまでの研究にならって、①南宋期から16世紀、②16世紀からアヘン戦争前夜、③アヘン戦争期から1950、60年代、④1950、60年代から現在のまでの4つの時代に区分し(Lai, 1998: 53)、このうち南宋期からアヘン戦争前夜までの閩南人の東南アジアへの移動を、それ以後の時代との対比を意識しつつ、歴史的に俯瞰するとともに、移動の経験の蓄積によって生ずる Diasporic Space の様態について明らかにしようとする。

## 2. 16 世紀以前の人口移動

### (1) 歴史的俯瞰

東南アジアへの中国系人口移動は、唐の時代に遡ることができる。661 年に建立された墓碑がフィリピンのレイテ島で発見されている（福建省志華僑志: 6）。

しかし、南海貿易が本格化するのは、宋代、特に南宋期（1127-1279 年）である。訪問地で冬を越すことを意味する「住冬」、訪問地に 10 年以上居住することを意味する「住蕃」という語が記録に現れるのもこのころである（萍州可談（朱彧 1119）「住蕃」、諸蕃志（趙汝适 ca1225）「住冬」「住蕃」）。

またブルネイでは、1264 年に建立された墓碑が見ついている。この墓碑は、当地で官職を得た泉州出身者のものであり、息子二人によって建立されたものである。南宋期以前にも南海への散発的な渡航は存在したであろうし、渡航先に定住した中国系の移民も居たであろうが、南宋期には、そうした渡航や定住が中国大陸との関係において把握されるようになるのである。

### (2) 移動の契機

この時期、閩南での人口移動の契機となったものは、同地域の人口過密と耕作地の不足を背景に、海禁を冒して海外に活路を見いだす者が多かったことによるとされる。福建省志には、「海者・閩人之田也」（天下郡国利病書）という当時の俚諺が掲載されている（福建省志、華僑志）。人口過密と海外進出は、鶏が先か、卵が先か、といった感もあるが、唐代より外国商人が多く去来し、Ibn Batuta が世界最大の港と呼んだ泉州を擁する閩南と海との繋がりは強い。

こうした海との強い繋がりを背景とする海上交易は、国家プロジェクトとして王朝の後押しによって進められた時期もあれば、逆に海禁政策によって王朝の取り締まりの対象となり、密貿易の性格を持つ時期もあった。

元の東南アジア遠征や明代の朝貢貿易、さらには鄭和の遠征は、国家プロジェクトとして、東南アジアへの人口移動の契機となった。元によるジャワ遠征(1293)の失敗により、多数の敗残兵が東南アジアに残留したと言われる。

一方、宋末、元末の王朝交代期には、混乱を避けて、避難民が東南アジアに向かった。宋末・元初(1279 年頃)には、広東、福建からベトナム、カンボジア、マラッカ、スマトラ、ジャワに多数の難民が逃れ、現地化していったと言われる。

### (3) 媒介者としての移民

この時期、中国系移民が移住先社会の変容に果たした役割は、東南アジアの港市国家と中国との通商、外交の媒介者としての役割である。

宋末や元のジャワ遠征、漂流等の理由で、東南アジアに定住するに至った中国系の移民は、現地での要職に就き、通商や海事面での活躍する者も少なくなかった。例えば、Majapahit 王国の通商や海事面での域内での優位性は、ジャワ遠征の敗残兵によって担われていた。また明の永楽帝(1403-24)の在位期間、Ayudhya, Malaca, Burnei では、中国系移民を媒介として、朝貢貿易による経済的利益と権威の獲得がなされた。朝貢貿易では、ジャワからも、倭寇に誘拐され、のち脱走した中国系移民が国使として、通商・外交交渉にあっている。

このような中国系移民は、商人と官僚の二重性を持っていた。この二重性は、港市国家での中間的エリートとしての地位を中国系移民に与えた。彼らは王権に権力基盤と経済基盤をもたらした。先進的な軍事技術をもたらすことで、王権の権力基盤を堅固なものとし、域内の流通と大陸での需要の間を取り持つことで王権に経済基盤を与えたのである。

一方、中国系の貿易商人も、同様の二重性を備えていた。鄭和の遠征は、外交的な側面のみならず、通商的な側面を併せ持っていた。1405-1433 にかけて、鄭和は長楽太平港を母港に、インドシナ半島、マレー半島からアフリカまで7度の航海を行ったが、この航海を通して、東南アジアでの丁子や胡椒、ナツメグ、蘇枋などの生産と流通を刺激するとともに、中国に措ける東南アジア産品の需要を喚起した。

このように16世紀以降、ポルトガルの香料貿易の活況を生む生産と流通の基盤は、すでに16世紀以前の段階で、中国系の移民と貿易商人によってある程度形成されていた。こうした環境は、中国系の移民や貿易商人にとって、快適な環境であったと考えられる。

#### (4) 中国社会とのつながり

東南アジアとのつながりは、中国大陸に何をもちたさだろうか。東南アジアとの交易が、経済的に、東南アジア産品の需要を喚起したことは想像に難くない。諸蕃志(趙汝适 ca1225)や島夷誌略(汪大淵 1350)には、各地の産品について豊富な記述がある。しかし、具体的にどの産品が中国の市場にもたらされたかはあまりはっきりしない。丁子や胡椒、ナツメグなどについても、中国での需要というよりも、ヨーロッパでの需要を見込んだものであったかも知れない。

経済的な側面以外に、社会的には、東南アジアとの人的なつながりに新たな展開を観ることが出来る。南宋期から「住冬」「住蕃」などの語が記録に登場するが、これらの語は、東南アジアへの貿易商人や移民が、中国大陸と関係を維持した存在として認識されていることを意味している。

このような大陸と南海との関係は、明代に至って、社会構造(親族構造)のなかに埋め込まれる。1438年に、ジャワの国使とその通訳として明に朝貢するが、彼らはもともと福建の漁民で漂流してジャワに到達した者たちであり、出身地の祖先祭祀を切望したとされる(福建省志)。移住先での墓の存在は、すでに南宋期に知られていたが、移民先での祖先祭祀は、必ずしも出身地での祖先祭祀とは結びついていなかった。これに対して、明代では、移住先と出身地が、「祖先祭祀」という人々の社会生活に即した用語によって結びつけられたのである。

このような祖先祭祀を契機とする移住先と出身地のつながりを根拠に、南海への人口移動の延長線上に閩南の地域社会が形成されていた、と結論することは早計であるにしても、海外への移動を、経済的な動機にもとづく要因に求めるだけではなく、社会構造、あるいは親族構造との関連で理解する視点の必要性を、このことは示唆している。従来の研究が指摘する「商人と官僚の二重性」や、移民の動機としての経済格差についても、社会経済史的な用語に任せきりにするのではなく、人類学の用語で再定義する必要がある。

### 3. 16世紀（明朝中期）～アヘン戦争期の人口移動

#### (1) 歴史的俯瞰

16世紀から19世紀の中国系人口移動は、東・東南アジアにおける西欧のプレゼンスを抜きにしては語るできない。

1509年にマラッカに進出したポルトガルに続き、1565年には、スペインがフィリピン諸島に、1600年頃には、オランダとイギリスが東南アジアに到達した。

これに伴い、メキシコ、ヨーロッパ、日本から東南アジアに銀が流入し、16世紀以前にすでにその下地が形成されていた東南アジア海域での交易は、活況を呈していく。また明もこうした動きに呼応して、1567年に海禁を解除し、民間の貿易を許可した。

東南アジア海域における交易は、清初の海禁政策にも関わらず、17世紀の明末清初にピークを迎えた。鄭成功の貿易ネットワークが海上帝国としての様相を呈するものもこの時期である。

1684年に清の海禁政策が撤廃され、ヨーロッパ人による広州での直接貿易が可能になると、相対的に中国系商人の東南アジア域内でのプレゼンスが高まった。この傾向は、18世紀の後半、東南アジア市場のグローバル化が加速化するにつれてさらに顕著になり、中国系商人と東南アジアの local elite との相互依存性は増していった。一方、こうした傾向を警戒した西欧植民地統治者は、中国系移民を植民地中間層としてとり込む努力をするとともに、中国系商人と敵対するようになった。

#### (2) 移動の契機

16世紀以降の海外交易の活況は、海外に渡航する商人—とりわけメキシコから銀が流入するルソンへの移住者の数を増加させた。しかし、この時期に海外に渡航したのは、裕福な商人ばかりではなかった。福建沿海の経済発展が進んだことで生じた経済格差の拡大は、土地を失った農民や手工業者の一部の流民化を招いた(廈門志 1644)。また明末清初の混乱や清による過酷な遷界政策と海禁政策の導入も、(地域社会の移民輩出メカニズムを活性化させ)、多くの移民を生み出した。

16世紀の人口移動には、ヨーロッパ勢力の直接的な関与も観ることができる。福建省志によると、この時期、ポルトガルの商人は、福建・広東沿海の漁民を拉致し、ポルトガル領東インドに売り飛ばしていたとされる(福建省志)。また1620年代にオランダ東インド会社は、ジャワでの甘蔗生産のため、甘蔗生産が盛んな福建から農民、鉄匠、木匠、泥水匠を招募したという(福建省志)。この時期、マニラの教会や台湾の要塞の建設に、中国系の職人が従事したとの記録が残っており(De Viana, 2001: 90-91)、商人のみならず、職人の流動化がかなり進んでいたことが想像される。

#### (3) 東南アジアにもたらした変化

16世紀以降の東南アジアへの人口移動は、ヨーロッパ市場での需要を背景に、ヨーロッパ勢力の海外交易や植民地主義と折り合いをつけるかたちで行われた。とりわけ17世紀には、スペイン、ポルトガルと中国や日本との直接的な貿易が制限されたことで、東南アジアは、香辛料などの地産品の交易のみならず、東アジアとヨーロッパとの中継貿易

の拠点として重要性をもった。その顕著なフロンティアの一つとなったのが、スペイン植民地のマニラである。

閩南とルソンとの関わりは 15 世紀に遡り、閩書に「福州に市舶司がおかれ、多くの人民が商業のため呂宋に渡った。呂宋は『西洋諸蕃』の去来する場所にあり、数万人が居住」(成化8年 1472 年) (閩書)との記事がある(ここでの『西洋諸蕃』とは、西洋鍼路上の諸国、つまりボルネオを挟んで西側の東南アジアである)。また同じく閩書の萬暦年間の記事に「娶婦長子孫者有之、人口以数万計」(萬暦年間 1573-1620) (閩書)とある。泉州や月港との近さとメキシコからもたらされる銀のため、ヌエバ・エスパニャ副王領フィリピナスの首府マニラは、閩南からの多くの商人や移民を惹きつけたのである。

このような中継貿易港としてのマニラと厦門、長崎、マカオの間には、ヨーロッパ勢力の海外交易を補完する巨大な交易ネットワークが生まれた。鄭成功の交易ネットワークは、そのうちの最も重要なものである。鄭成功の交易ネットワークは、厦門、安平を拠点に、長崎、マニラを結んでおり、同じ海域で行われるオランダ東インド会社の交易を凌駕していた。

しかしながら、1662 年に鄭成功が亡くなると、徐々に交易ネットワークは弱体化していく。1683 年、清が台湾に侵攻し、台湾での鄭氏政権を滅ぼすと、閩南籍の官兵は、フィリピンを始めとする東南アジアに逃亡した。また 1684 年には、清がヨーロッパ人に広州での貿易を認め、中継貿易港としての東南アジアの意義は後退した。

この結果、東南アジアでの中国系移民への依存度は、18世紀において、かえって高まった。東南アジアにおける中国系移民の浸透の度合いは、その土地土地の条件に応じて異なっている。16 世紀以降、スペインの植民地であったフィリピン諸島や、オランダの植民地であったバタビアでは、中国系商人との海外交易が沈滞する一方で、現地化した中国系移民が域内の流通を担い、植民地中間層として徐々に力をつけていった。

その他の地域では、王権と中国系商人／移民の共存や積極的な招致、官僚機構への組み入れ、現地化した中国系移民による政権の樹立など、東南アジアのローカル・エリートとの多様な関係を通して、地域社会に浸透していった。アンソニー・リードは、18世紀前半にけるシャムでの中国系商人の揺るぎない地位をはじめ(1996: 44)、バタビア、ミンダナオ、スルー、ベトナムなど東南アジアのほぼ全域で中国系移民がローカル・エリートの一端を担ったことを、つぶさに述べている(Reid, 1996: 45-48)。

16 世紀以降の東南アジアの地域社会の形成は、中国大陸から大量の中国系人口を受け入れる第1段階と、中国移民が地域社会に浸透する第2段階に分けることができる。このうち第2段階では、英仏による植民地統治が本格化する 19 世紀までの時点で、東南アジアの地域社会では、西欧のインパクトやローカルなデマンドに適応しながら、中国系移民の生存を支える環境がいったんは出現したと観てよいだろう。

#### (4) 福建での地域社会の形成

東南アジアへの人口移動に伴って、閩南ではどのような地域社会が形成されたであろうか。

16 世紀から18世紀までの時期、福建省沿海では経済が発展し、東南アジアとの海上交易が活発化する。それと同時に、フィリピンを経由して、サツマイモ、トウモロコシ、タバコなどの新大陸の農作物が導入される。

このうち最も重要な作物は、16世紀末に導入されたサツマイモである。福建沿海は、米作に不向きな砂地の土地が多いが、サツマイモはそうした土地でも育ち、食糧事情の改善に寄与した。

サツマイモ栽培の導入による食糧事情の改善は、18世紀から19世紀にかけて、急激な人口増加をもたらした。1620

1670の間、中国の人口は、内戦、反乱、侵略、感染症によって、17世紀初頭の1億人から5000万人まで減少したが、1740年から1800年までの間に3億にまで増加した。厦門大学の鄧曉華教授は、サツマイモが導入されたことで、福建の人口が増加し、東南アジアへの移民が爆発的に増加したと述べている。

サツマイモは、生食、蒸しイモの他、麺などに加工して食べる方法もあるが、一般的なのは、米とサツマイモの粥として食べる食べ方である。この食べ方は、今日でも福建省で観ることができるが、より重要なのは、東南アジアの移民先や台湾において望郷の念を喚起する食べ物となっていることである。サツマイモは、単に移民の生存を支える糧食ではなく、移民が故郷とのつながりを確認するセンチメンタル・バリューともなっているのである。

もちろん、これは19世紀以降の閩南移民にとってサツマイモがどういった食糧であるか、といったことから類推される仮説であり、19世紀以前の移民にとって正しいかは検証の必要がある。この仮説が正しいとすれば、サツマイモ栽培は、閩南と東南アジアに共通する生態学的環境の一部として、中国系の人口移動を支え、同時に、東南アジアと中国の感情的なつながりを確認する手段ともなってきたと言うことができよう。

生態学的環境の閩南から東南アジアへの移転は、建築技術等の物質文化の面でも観られる。既に述べたように、16世紀の人口移動には、木匠、泥水匠、石匠等の手工業者も含まれる。こうした手工業者は、例えばマニラの教会や台湾の要塞の建設に参加した(De Viana, 2001: 90-91)。また中国系の商人によってもたらされた陶磁器や服飾も、東南アジアの物資文化に大きな影響を与えた。中国の環境は、都市の建造物という点でも、またその他の物質文化という点でも、東南アジアに再現されているのである。

福建と東南アジアは、交易と人口移動のみならず、祖先祭祀や族譜を契機として、相補的な関係を築いてきた。16世紀以降、サツマイモ等の作物が福建に導入されたことで、こうした関係は、双方でのある程度似通った、しかしいくつかの決定的な違いも存在する地域社会の形成という新たな段階を迎えたと言えよう。

#### 4. 環境の創造と人口移動の根幹

Columbian Exchange によって西欧近代的にフォーマット化された世界において、中国系の人口が移動を通して創造する環境とはいかなる環境だろうか。

16世紀以前の中国系の移住先では、移住者が首長の権力を補完することで、中国系移住者を結節点とする交換システムが成立した。また、徐々に移住先に定住する人たちと出身地との関係が生み出され、出身地に海外と繋がりを持つ地域社会が萌芽した。

16世紀からアヘン戦争前夜にかけての中国系の人口移動は、西欧諸国の東南アジア進出に呼応し、貿易ネットワークを生み出す。そこでは日本、そしてメキシコからもたらされた銀の他、サツマイモ、トウモロコシ、タバコ等の新大陸原産の農産物が中国大陸に流入し、中国の社会環境と生態学的環境に大きな変化をもたらした。また中国大陸から東南アジアへは、製糖技術、製塩技術、建築技術、鉄、陶磁器、絹織物がもたらされ、建築技術等は、ヨーロッパの建築様式を植民地に再現するのに用いられた。一方、陶磁器や織物は、ヨーロッパの食と衣に、物質的にも、思想的にも、大きな影響を及ぼした。

このような中国大陸と東南アジアの地域社会に人口的な基盤を提供し、人口移動の推進力となったのが、サツマイモ栽培である。もともと福建は耕作可能な土地が少なく、多くの人口を支える基盤が脆弱であった。このため海洋への進出に活路を見出してきたわけだが、16世紀にフィリピンを経由してサツマイモが導入されたことで、多くの人口を支える

ことができるようになった。18世紀の人口爆発は、サツマイモ導入の直接の結果であろう。閩南の人々にとってサツマイモは、今日なお郷愁を誘う食糧となっている。こうしたサツマイモ栽培は、東南アジアへの中国系の人口移動を通じて逆輸出されたと考えられ、結果として、中国系の人口移動を支える環境が中国大陸と東南アジアの双方に形成されたと推測できる。

中国系の人口移動は、これまで社会経済的な要因にもとづいて説明されることが多かった。しかし、人口移動が移民にとって快適な環境の創造に関わるとすれば、移動者の経験や心理にも注目する必要がある。ここでは、中国系の人口移動の文化的な背景に焦点をあててみよう。この問いは、移動者が備えていたとされる二重性がどのようなものであったか、もっと言えば、意味で商人であったかという問いに関わっている。二重性は、「商人」と「官僚」、あるいは指令と交渉の二重性ということもできるし、もし前提となる社会構造という点に拡大して述べるとするならば、階層構造と対等性の間の二重性ということになる。こうした二重性を、私たちは中国系の移民(男性)の発展サイクルのなかに発見できる。

中国系の人口移動は、個々の移住者の経済的な動機にもとづきつつも、出身地の親族構造との関連で理解することができる。漢族の発展サイクルでは、成人男性は、一方、他の成人男性との対等性を表明し、他方で自らが家長として下位世代の成員との支配従属関係を維持し得ることが理想的な姿とされる。しかし、弱小宗族の成員や大規模宗族の弱小な分節の成員は、こうした他の成人男性との対等性を表明し、自らが階層構造の頂点に立つ機会が制限される。海外への移住は、こうした支配従属関係を逃れ、他の成人男性との対等性を主張する機会を提供するのである。海外への移住者が、他人と対等な商人としての性格と、階層構造で指令を下す立場にある官僚としての性格の二重性をそなえているとされるのも、こうした理由によると考えられる。

19世紀以前の中国系の人口移動は、こうした二重性を背景としつつ、東南アジアと中国という二つの離れた土地を、ひとつの Diasporic Space に結びつけた。15世紀から記録に登場する移住者の祖先祭祀を目的とした故郷への帰還は、こうした二重性を補強するものと考えられることができるだろうし、今日の華人社会の企業家が、「コミュニティの顔役」、あるいは「領袖」と呼ぶにふさわしい性格を持つのも、この二重性による。

以下の各報告にも観られるように、19世紀以降の中国系の移動は、こうした19世紀以前の人口移動の構造を部分的に踏襲しながらも、それとは異なる条件のもとに、異なったタイプの Diasporic Space を生み出している。

アヘン戦争以降の時代の人口移動は、西欧市場のニーズと植民地主義に条件づけられた世界の様々な部分への多様な移動と適応を生み出し、移住先と出身地の双方において、様々な生態学的、社会的環境な変化を誘発してきた。

19世紀以降の広東からの移民も、Diasporic Space の複数性の顕著な一例である。広東系の移民は、閩南系の移民よりも、遅い時期、17-18世紀に始まる(少なくともそう見える)。それは、広東からの移民がいなかったからではなく、17-18世紀に漢人(ないし広東人)のアイデンティティが確立するまで、海外への移住者が地域社会の中から排除されてきた(広東からの移住者として記録が残されてこなかった)からではないだろうか。こうした広東系の人口移動のあり方は、閩南人が、いったん音信の途絶えた海外移民であっても、地域社会にとり込むことができるシステムを持っているのとは対照的である。

もちろん、これは程度の差といったことなのかもしれない。しかし、福建、広東での地域社会の形成のされ方をめぐるとした違いは、例えば19世紀以降の両者のアイデンティティやナショナリズムへの関わり方の違いや、福建系のプラナ

カンが存在するが、広東系のそれは存在しないなどの根本的な違いを生み出している。閩南が常に外に対して包括的であるのに対して、広東系は外を排除することで求心力を保っているのである。

1950年代、60年代以降の人口移動はどうだろうか。この時期の移動について、Laiは、「多様な社会階層の移民を必要とする西欧近代の『中心』への移動」と性格づけしている。この時期の移民には、サービス業に従事する非熟練労働者に加え、様々なプロフェッショナルや留学生が含まれ、出身地域も中国全土に拡大する。また移動を契機とする環境の変容も、産業社会から消費社会を前提としたものにとって代わり、「出身地」や「アイデンティティ」も消費の対象となる。

この時期の人口移動については、世代進度も浅く、アヘン戦争以前の移民輩出構造を踏襲しているのか、いないのか、西欧近代や他の Diasporic Space との間でどのような干渉が観られるのか、判断するのは今後の課題とせざるを得ない。しかし、1990年代以降の中国市場の圧倒的なプレゼンスによって、世界は中国的にフォーマット化されつつある。それはおそらく今日の世界の西欧近代的なフォーマットが、Columbian Exchange をきっかけとしていたように、次代の世界のあり方に大きな影響を与えるきっかけとなる。

主要参照・参考文献：

(日本語・中国語)

片山剛 2013 「漢族と非漢族をめぐる史実と言説—広東省を中心に」大阪大学中国文化フォーラム(編)『現代中国に関する13の問い—中国地域研究講義』大阪大学中国文化フォーラム 3-25頁。

ギルロイ、ポール 2006『ブラック・アトランティック—近代性と二重意識』月曜社

桑原隲造 1989『蒲寿庚の事跡』平凡社東洋文庫

湯錦台 2001『大航海時代的台湾』如果出版社

深澤貴行 2005「南宋沿海地域社会と水軍将官」『中国—社会と文化』20

福建省地方志編纂委員会(編)1992『福建省志 華僑志』福建人民出版社

福建省地方志編纂委員会(編)1997『福建省志 民俗志』方志出版社

マクニール、ウィリアム・H 2014『戦争の世界史』(上)中央公論社

山内晋次 2003『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館

(英文)

Crosby, Alfred W. 2003 *The Columbian Exchange: Biological and Cultural Consequences of 1492* Praeger Publication.

De Viana, Lorelei D.C. 2001 *Three Centuries of Binondo Architecture 1594-1893: A Socio-Historical Perspective*. Manila: UST Publishing House.

Ingold, Tim 2011 "Point, Line, Counterpoint: From Environment to Fluid Space." *Being Alive: Essays on Movement, Knowledge and Description*. Routledge.

Lai, Walton Look 1998 "Emigration from China." In Pan, Lynn (ed.). *The Encyclopedia of the Overseas Chinese*. Singapore: Chinese Heritage Center.

Mann, Charles C. 2012 *1493: Uncovering the New World Columbus Created*. Vintage.

Ried, Anthony 1996 "Flows and Seepages in the Long-term Chinese Interaction with Southeast Asia." In Anthony Reid ed., *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asia and the Chinese*. University of Hawaii Press.